

## 様式C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年 5月 7日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19530582

研究課題名（和文） 社会道徳的志向性としての「自愛の思慮」の発達

研究課題名（英文） Development of prudential thinking as a socio-moral orientation

研究代表者

首藤 敏元（SHUTO TOSHIMOTO）

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：30187504

研究成果の概要：

本研究は「自愛の思慮」が児童の社会道徳的ジレンマ場面での判断にどのように出現し、それが社会的認知の発達といかに関連するかを検討した。「自愛の思慮」の思考は個人領域の判断と理由づけの中で出現することが多く、その傾向は小学校中学年以降に顕著になり、心の理論の二次的信念課題の達成と関連することが示唆された。社会道徳的指向性としての「自愛の思慮」の思考は児童期に達成される社会的認知であり、その思考が活性化されることにより、道徳判断と行動が繋がると考察された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：道徳性心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学（3902）

キーワード：道徳発達，自愛の思慮，社会的認知，生き方，心理的健康，道徳教育

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は「自愛の思慮」（prudential thinking）が児童の社会道徳的ジレンマ場面での判断にどのように出現し、それが社会的認知の発達といかに関連するかを明らかにする。また、青年の生き方として、「自

愛の思慮」がどのような構造をしているのか、それと心理的適応との関連はあるのかについても吟味する。「自愛の思慮」とは、自分の行動が直接的、間接的にプラス（マイナス）の結果になって自分に戻ってくることを予期する認知であり、社会的領域理

論 (social domain theory) における個人領域 (personal domain) の機能のひとつである。例えば、「情けは人の為ならず」の考えから向社会的に振る舞おうとする、「校則を守らないと、自分の評価が下がり、本当の自分のよさが分かってもらえなくなる」という推論、「カンニングをすると、いい点は取れるかもしれないが、自分のためにはならない」という判断などに見ることができる。

## 2. 研究の目的

### (1) 研究 1 : 子どもの社会的逸脱行動に対する親の社会道徳的情報処理

子どもの道徳発達にとっての主要な環境として、親の社会的情報処理を取り上げ、「自愛の思慮」と関連した解釈が親の情報処理にどの程度認められるかを検討した。

### (2) 研究 2 : 個人領域の志向性としての「自愛の思慮」の発達

社会的領域理論に基づき、小学生が社会道徳的場面を解釈し判断する際に、各領域 (道徳領域、慣習領域、個人領域) の認知をどのように働かせて判断するか検討した。さらに、「自分の行為が後に自己への結果としてどのように戻ってくるか」という「自愛の思慮」の認知がどのように出現し、「心の理論」の二次的信念の理解、および内在的正義とどのように関連するのかについて検討した。

### (3) 研究 3 : 青年の生き方と自愛傾向の自己認知

「自愛の思慮」とは自分の行動が直接的、間接的にプラス (マイナス) の結果になって自分に戻ってくることを予期する認知であり、社会的領域理論における個人領域の機能のひとつである。研究 3 は、大学生を対象に、「自愛」の構造を分析することを目的とした。

### (4) 研究 4 : 道徳的自律、自愛と心理的健康との関連

生き方としての「自愛の思慮」が、親子

葛藤場面での道徳的自律と心理的健康にどのように関連しているかについて分析することを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 研究 1 : ①調査対象 埼玉県私立幼稚園・保育所に在園する子どもの母親 131 名、父親 39 名の計 170 名が調査に協力した。②調査項目 道徳、慣習、個人の各領域に典型的な葛藤場面、および多面的な葛藤場面の合計 12 場面を設定し、次の質問を行った。A.逸脱判断 (問題の有無), B.逸脱の内容 (子どもの行為、親への反抗、両方), C.判断の理由 (6 種類), D.反抗する子どもへの関わり方 (4 つから選択)。6 種類の判断の理由は次の通り。理由 1 : 人を精神的・身体的に傷つけているかどうか (道徳領域), 理由 2 : 子どもの行為は人としてやってはいけないことかどうか (道徳領域), 理由 3 : 周りの人に迷惑をかけていないかどうか (慣習領域), 理由 4 : マナーを守っているかどうか (慣習領域), 理由 5 : 子どもの行為が後に自分自身への不利益になって戻ってこないかどうか (自己管理), 理由 6 : 対人関係の中で悪い評判がおきないかどうか (自己管理)。理由 5 と理由 6 が「自愛の思慮」の思考と見なした。

(2) 研究 2 : ①調査協力者 東京都内の公立小学校 3 校、1 年生から 6 年生の計 537 名であった。②手続き 調査は 2007 年 7 月中旬から下旬、9 月上旬から中旬にかけて各学校または各家庭で実施した。③質問紙の構成 A.社会的な 6 つの場面 (木登り、すべり台の上から他者を押す、挨拶をしない、仲間入り拒否、悪口を言う、食事中に行儀が悪い) を作成した。各場面の流れは主人公がある行為を行い、親は主人公の行為に注意するが、主人公は親に反抗するというものであった。質問項目は、逸脱判断、逸脱判断の理由、親に注意されたときの子どもの反応、6 つの判断理由 (理由 1 : 他

者への身体的・精神的危害、理由 2：人の道理、理由 3：周りへの迷惑、理由 4：マナー、理由 5：自己の身体・心理への結果、理由 6：他者からの悪い評判)であった。B. 子安らによるパーナーらの二次的信念課題、C.内在的正義に関する質問(自由記述)の計 8つの場面から質問紙を構成した。

(3)研究 3：①質問項目 予備調査として「生き方」に関する質問項目を集め、調査票を作成した。例えば、「人との関係は、自分を成長させる。」「友だちの苦労や悲しみは、直接自分とは関係がなくても、自分自身の問題として考えようとする。」「今の努力は、将来必ず自分にとってプラスになると思う。」「人の幸せを見ると、自分もうれしくなる。」「自分の体と心を大切にしている。」「自分が何をしても学校や社会は変わらない。」「世の中が悪くなっても、自分には責任がない。」「人に見つからなければ、ルール違反をしてもよい。」「若者の意見は、この世の中では通らない。」「今日が楽しければ、それでよい。」「偉い人に従っていると得をすることが多い。」「世界の人々と調和して生きていくのは不可能だ。」「髪型や服装など、個人の自由になることでも、自分の評判の下がるようなことはしたくない。」「正しいと思うことでも、自分の将来に傷のつくことはしたくない。」「挑戦して失敗するよりも、無難な人生を送りたい。」であった。尺度の妥当性をみるために、伝統的性役割感、母性愛信仰傾向の尺度を使用した。②調査対象 大学生 348 名を対象に調査し、「生き方」の中に「自愛」の生き方がどのように出現するか分析した。

(4)研究 4：①調査項目 A.道徳的自律反社会、礼儀作法、健康管理、趣味・嗜好、友達関係、身体・外見、勉学・進路の 7 場面、場面ごとに 3 項目、合計 21 種類の社会道徳的行為が描かれた。行為ごとに 4 種類の質問が用意された。質問 1：子どもの自己決定性[4 段階]、質問 2：親権威の正

当性[4 段階]、質問 3：親の権限の受容/自己決定(大学生と親との意見が合わないとき、最後はどうするのがよいか)[2 段階]、質問 4：親介入の予期(あなたの親はどのようなかわり方をすると思うか)[4 段階]。B.心理的健康 UPI の 60 項目が用いられた。②手続き 質問票は授業を通して配布され 1 週間後に回収された。調査は無記名。

#### 4. 研究の成果

(1)研究 1：親による場面の解釈は、子どもの逸脱の性質(道徳、慣習)に応じて変化するものの、複数の領域概念を反映していることが示された。子ども自身への影響を考える「自愛の思慮」の解釈は個人道徳の場面で多く認められた。親による場面の特色に沿った多角的な解釈と多様な関わり方は、子どもの自律的な社会的行動の発達を促すと考えられる。

(2)研究 2：①逸脱判断と内容 ほとんどの子どもは各場面に「主人公は悪いことをした」と回答する子が多かった。木登り場面では「親への反抗が悪い」と回答する子が半数おり、それ以外の場面では「主人公の行為が悪い」と回答する子が多かった。

②親権威の受容 「挨拶をしない」場面では親権威の受容が高い傾向がみられ、「木登り」場面では低くなる傾向がみられた。

③各場面の判断理由 全体的な傾向としては複数の理由が回答されていた。その中でも特に回答が多かったものは、「木登り」場面では「理由 5」「理由 2」、「すべり台の上から他者を押す」場面では「理由 1」

「理由 2」、「挨拶をしない」場面では「理由 1」「理由 5」、「仲間入り拒否」場面では「理由 1」「理由 2」、「悪口を言う」場面では「理由 2」「理由 1」、「食事中に行儀が悪い」場面では「理由 5」「理由 4」であった。④各場面の理由と心の理論、内在的正義との関連性 場面×理由×二次的信念の理解の交互作用効果が有意であった

( $F(1, 25) = 2.375, p < .01$ )。内面的正義を含んだ全ての交互作用効果は有意でなかった。小学生はさまざまな領域の認知を働かせて社会道徳的判断をする傾向がみられた。二次的信念の理解のある子どもは、場面によっては、自愛の思慮の認知をより強く働かせることが示された。今後、領域調整の認知プロセスをより深く検討する必要がある。

(3) 研究3：合計25項目についてI-T相関を求め、有意に達しなかった1項目を分析から除外した。24項目について、主因子法による因子分析を行い、固有値1以上の因子3つを抽出した。バリマックス回転後の因子負荷量のパターンから、因子を命名した。つまり、生き方は「自己向上的自愛」「保身の自愛」「道徳的無力感」の3因子構造であることが見出された。性別に因子分析を行ったところ、全体での因子構造と同一のものが得られた。自己と社会との関係にかかわる志向性としての個人道徳には3つの側面があることが示された。積極的に他者や社会にかかわり、人や社会のために自己を発揮し、自分を高めていこうとする側面、利己的な生き方や無力感に代表される心理的に社会から離れ、社会に関心を持たず、役割や階層関係を気づかない、利己的な動機を中心に他者とかかわろうとする保身の側面である。これらの側面は現代社会での人々の生き方と関連していると思われる。3つの因子に対応する項目から3種類の尺度を作成した。 $\alpha$ 係数は「向上的自愛」が.78、「無力感」が.75、「保身の自愛」が.71であった。尺度ごとに、該当する項目での回答の合計点を求め、それを項目数で除した値を尺度得点とした(1～5点の間に分布)。性差をみたところ、向上的自愛では女子>男子、無力感では男子>女子、保身の自愛では有意差は認められなかった。尺度の信頼性と妥当性も確認された。

(4) 研究4：①道徳的自律のパターン 親

子葛藤場面での「親の権限の受容/自己決定」(質問2)に関して、自分の意志優先の自己決定をする判断を1点とし、7場面ごとの合計得点が算出された。この標準化得点についてK-means法によるクラスター分析が実施された。その結果、3つのクラスターが見出された。第1クラスターは、身体外見と趣味嗜好の場面での親権威を認めないクラスターであり、「規律型」と命名された。第2クラスターは、反社会的場面と礼儀作法場面では親権威を強く認め、身体管理場面でもある程度それを認めるものの、身体外見、趣味嗜好、勉学進路、友達関係の場面では強く自己決定を発揮するのが特徴であり、「自由型」と命名された。第3クラスターは、反社会的場面では親権威を認めるものの、その他の場面ではそれを認めないのが特徴であり、「自由感肥大型」と命名された。

②道徳的自律のパターンとUPIとの関連

60項目のUPI尺度から全般的不適応、健康度、不健康度、不安障害、抑うつ等の得点が算出され、クラスターを要因とする分散分析が実施された。その結果、クラスターの主効果はどれも有意には達しなかった。次に、UPIの呼出基準に基づき、基準に該当する学生(呼出群)と非該当の学生(通常群)とが区別された。そしてクラスターとのクロス表が作成された。その結果、通常群では自由型の学生が顕著であり、呼出群では肥大型の学生が多かった( $\chi^2 = 7.74, df = 2, p < .05$ )。道徳発達が個人の生き方や自己概念と調和することにより、判断と行動の一致が高まることを示唆する研究もある。今後、道徳的自律のタイプと自己概念の発達との関連について検討する必要がある。

(5)総合的考察：「自愛の思慮」はもともとは哲学者ベンタム(Bentham)による徳の分類のひとつである。これによると、自愛の思慮の徳は、将来の幸福を得、不幸を避けるために、現在の幸福を犠牲にするこ

とにおいて発揮される。心理学的には、利己的な動機による向社会的行動であり、低次元の道徳的動機であると見なされてきた。

「自愛の思慮」を心理学の観点から取りあげたのは Turiel らによる社会的領域理論に基づく研究である。社会的領域理論に関して、人は道徳(moral)、慣習(conventional)、個人(personal)という多元的な領域概念を働かせて、社会的な出来事を解釈し意思決定をすること、幼児でさえ3つの質の異なる概念を素朴ながらも獲得していること、3つの領域概念は質的に異なった概念であり、質の異なる社会的文脈の中で認知的に構成されることが示されている。しかしながら、3つの領域概念がどのように調整されて、ひとつの意思決定に至るかは十分検討されていない。さらに、「判断はできるが行動につながらない」という判断と行動制御力との関係についてはほとんど検討されていない。現在、これらの課題を発達的に明らかにしていくことが、道徳発達研究に求められている。

この課題を解くキーワードが「自愛の思慮」である。道徳領域概念が働く際、「公正であるか」「生命は大切にされているか」という志向性が発揮される。慣習領域概念では「規則はあるか」「秩序は乱されていないか」などの志向性が発揮される。個人領域概念では「自己決定できるか」「自分らしいか」という志向性が発揮され、道徳的、慣習的な拘束から離れようとする動機づけを高める。個人領域の志向性の肥大化は最近の中高生の自己決定主義に現れている。「自愛の思慮」は個人領域概念の作用のひとつとして、自己決定や自由感の発揮を抑制する、つまり道徳的、慣習的に振る舞うよう動機づける。さらに、慣習場面での適切な行動は、慣習領域の志向性と、個人領域での「自愛の思慮」がともに機能したと見ることができる(例。「挨拶しないと“危険な人物”と見られたり“けんかを

売っている”と見なされたりするから、挨拶をする」「校則を守らないと、将来ルールを守れない大人になる」)。

このように、「自愛の思慮」は個人領域概念を社会道徳的に機能させるだけでなく、道徳領域と慣習領域の概念とともに機能し、規範の持つ行動制御力を高めると考えられる。首藤・二宮は、小学生よりも中学生の方が慣習場面において個人領域の概念を働かせる傾向が有意に高いことを見出している。これは、中学生の方が領域概念が曖昧であることを意味するのではなく、個人領域の「自愛の思慮」が中学生でより高く機能したためと考えられる。

今後、「自愛の思慮」の思考が活性化される状況の分析、道徳発達と自己概念の傾性とを統合するモデルの構築、道徳的自律と精神的健康との関連に関する研究に着手する必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

- ①首藤敏元 2008 道徳性の心理学 指導と評価 (図書文化), 637, 46-49. [査読なし]
- ②大池明日美・首藤敏元 2008 子どもの社会的行動における親の社会的情報処理 埼玉大学紀要教育学部 (教育科学), 57, 123-132.[査読なし]
- ③首藤敏元 2009 自律的な社会性の発達 教育心理学年報 (日本教育心理学会), 48, 75-84. [査読あり]

[学会発表](計 7 件)

- ①大池明日美・首藤敏元 子どもの逸脱場面における親の社会的情報処理 日本保育学会第 60 回大会、1122-1123 頁、2007.5.10 (十文字学園女子大学)、[査読なし]
- ②橋本多恵・首藤敏元 子どもの対人葛藤場面における保育者の対処方法 日本保

- 育学会第 60 回大会、1218-1219 頁、2007.5.10 (十文字学園女子大学)、[査読なし]
- ③大池明日美・首藤敏元 小学生の社会道徳的場面の判断と領域調整 日本発達心理学会第 19 回大会、542 頁、2008.3.20 (大阪国際会議場)、[査読なし]
- ④二宮克美・青木多寿子・首藤敏元 ラウンドテーブル Character Education の現状 日本発達心理学会 19 回大会、196 頁、2008.3.20 (大阪国際会議場)、[査読なし]
- ⑤ Xu, Y. and Shuto, T. “Mothers' Beliefs towards Motherhood and Their Parenting Feelings in Japan and China” at the 9th annual conference of Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA), 2008.7.8 ( Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand)、[査読あり]
- ⑥ Shuto, T. “Current Situations of Paternal Child-rearing and Efforts in Supporting Father-child Relationships in Japan” at the 9th annual conference of Pacific Early Childhood Education Research Association ( PECERA) , 2008.7.8 ( Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand).[査読あり]
- ⑦山岸明子、長谷川真理、首藤敏元、越中康治 ラウンドテーブル：道徳発達の最前線を知る 日本発達心理学会第 20 回大会論文集、88 頁、2009.3.25 (日本女子大学)、[査読なし]

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

特になし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

首藤 敏元 (SHUTO TOSHIMOTO)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：30187504

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし